

西日本におけるスキー場及び周辺宿泊施設の実態と課題

準会員 ○友安夏月 1*
正会員 岡松道雄 2**
同 宋 俊煥 3***

観光資源 立地特性 類型化

第1章 はじめに

日本にスキーが移入されて以来、レクリエーションとしてのスキーは国内において大きな観光資源として急成長した。このスキー観光によって、今まで人があまり寄り付かない冬の山間部では多くの人でにぎわい、スキーの大衆化に伴ったマストツーリズムによって多くのスキー場や宿泊施設が設置されたのである。当時のスキーは流行の最先端としてのブランドがあり、人々がこぞってスキー場へと足を運んだ。さらには、都市からの利用客はスキーや宿泊を通して多くのお金をスキー場地域へと落とし、さらには都市からの資本の参入は地域の活性化を促すこととなった。しかし、バブル経済の崩壊やレジャーの多様化といった背景により、スキーの利用客が急激に減少を始め、スキー観光の衰退がはじまった。さらには、積雪量の減少とも相まって、多くのスキー場では運営が困難となり休業・廃業が目立つようになった。この現象は周辺の宿泊施設でも同様であり、スキー場や周辺施設の活気が薄れつつあることが課題としてあげられる。

このような現状から、これからのスキー場は多様性や個性が求められるようになることが推測される。このことから、スキー場を一括りに捉えるのではなく、いくつかのタイプに分けることで、それぞれの望ましいあり方を追求していくことが必要となるだろう。本研究ではスキー場における特性をもとに分類し、宿泊施設数や周辺環境を把握することで、これからのスキー場を検討する。

第2章 研究方法

2-1 対象地域の把握

本研究では西日本を研究対象地とし、定義は中部地方を含まない近畿地方以西とする。その内訳としては、近畿地方の2府5県、中国地方の5県、四国地方の4県、九州地方の7県（沖縄県を除く。）の合計2府21県とする。

2-2 スキー場の定義と周辺地域の範囲

(1) スキー場の定義

スキー場の定義は曖昧であり、多様なスキー場の形態が見られる。ここでは明確なものとしてのスキー場を把握するために、索道（リフト）が設置されていることを条件とし、国土交通省鉄道局監修の「鉄道要覧」（2021）を利用した。⁽¹⁾ 索道の記載がないものや全てが休止中であれば閉鎖・休業中のスキー場であるとし、全体数から除外した。加えて、スキー場の規模を考える上では、スキー場の範囲を定める必要がある。そのため、本研究では特定のスキー場ガイドブックによる基準を採用した。それは、実業の日本社が発行する「ニッポンのゲレンデ」である。⁽²⁾ また、リフトは年ごとの積雪や経営状況等によって稼働数が異なることがあるため、ガイドブックに

掲載されているリフトを基準として規模の把握を行った。

(2) 周辺地域の範囲

スキー場の利用客は出発地から目的地のスキー場までの道中の施設を利用することが考えられる。しかし、スキー場からの距離が遠くなるほどスキー場との関連度が低くなることが予測される。よって、本研究では「周辺地域」を徒歩10分圏内とし、道路に接した始点となる索道から直線距離で0.8kmとした。ただし、範囲内に含む条件として、スキー場の始点となる索道から施設までの経路も範囲内に含まれていなければならないこととする。

2-3 分析方法

白坂（1965）では、スキー場の立地条件として①自然条件（気候）、②自然条件（地形）、③交通アクセスの3つの条件が重要であるとされている。⁽³⁾ また上記に加えて、白坂（1975）では、④入れ込み客数、⑤付属施設、⑥宿泊、⑦スキー集落の性質、⑧集客範囲を取り入れて分析を行っている。⁽⁴⁾ 本研究では、西日本におけるスキー場の得られたデータから4つの条件のもと考察を行った。

（表01）このうち数値データが得られたa~cの条件からクラスター分析を行い、類型化を行った。それぞれの類型タイプから見えるスキー場の特性とスキー場周辺地域の宿泊施設数を把握し、考察を行うこととする。

表01 分析に用いる属性・指標

条件	属性・指標
a 地形	標高
b 交通・都市近接	近隣IC・大都市からの距離
c 規模	規模指数
d 周辺地域	宿泊施設数

注) 規模指数 = $\sum 1$ 時間当たりの輸送人員 (人/h) × 索道距離 (km)
各索道の輸送人員は、1人用:600、2人用:900、3人用:1,800、4人用:2,400として値を求める。

第3章 西日本におけるスキー場数と類型化

3-1 スキー場数の把握

索道の存在に基づいた本研究の数え方によれば、令和3年度に営業を行っているスキー場は46ヶ所であった。スキー場数は兵庫県が卓越して多く分布しており、2番目の広島県の2倍以上である。また、5ヶ所以上のスキー場が見られるのは、上記に加えて滋賀県と岡山県で、そのほかは少数かもしくは立地していない。（図01）さらには、スキー場情報サイト「SURF&SNOW」⁽⁵⁾ に掲載されているスキー場数で比較すると、西日本のスキー場数割合は

全国のスキー場数に対して約14%で、北海道や長野県の割合よりも低い数値であることがわかる。(図02)

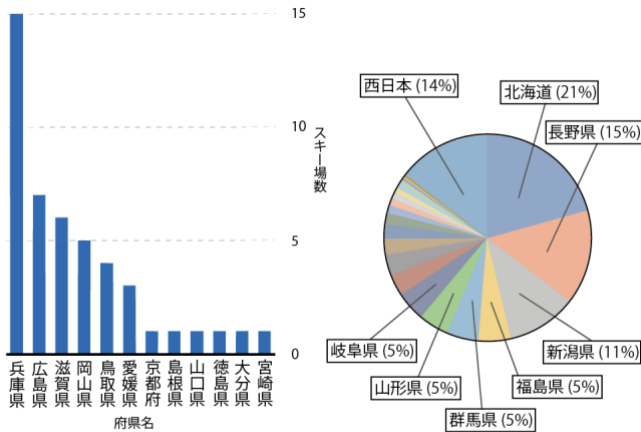


図01 西日本におけるスキー場数 図02 全国のスキー場数割合

3-2 スキー場の立地と都市の近接性

スキー場は首都圏などの大都市圏に多く分布することが言われている。⁽⁶⁾ このことから、各地方において人口が多い、大阪市・広島市・福岡市・名古屋市を中心とした直線距離 300 km 内を大都市圏として設定した。西日本の人口最多都市の大阪圏内では、六甲スノーパークやびわ湖パレイが都市部近郊に立地しているが、多くのスキー場が集中しているのは 100km~250km 内であり、所要時間としては 2 時間から 3 時間程度である。広島圏内では、市内から 100km までのスキー場数が他の大都市圏に比べて多くみられるが、スキー場が集中しているのは 200km~300km 内で、所要時間としては 2 時間から 4 時間程度である。福岡圏内では、300km 圏内のスキー場が 5 つと極端に少ない。また名古屋から 300km 圏内は滋賀県全域から兵庫県中部の位置まで及んでいる。(図03)

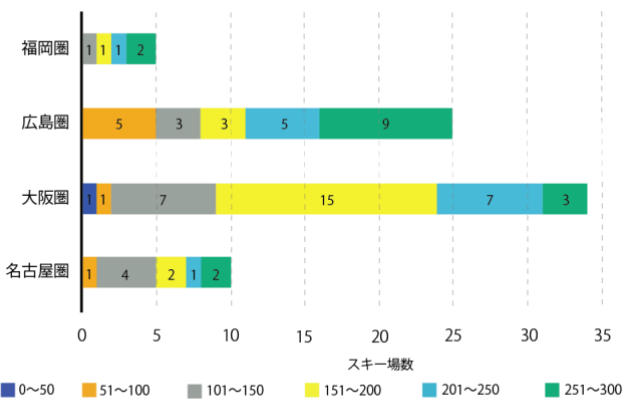


図03 都市圏別スキー場数 (n=46)

3-2 スキー場の類型化

クラスター分析による類型化を行った。データは最高標高・最低標高・近隣 IC からの距離・各大都市からの距離・規模指数の各値を標準スコアへと変換し、ユークリッド距離によるウォード法を使用した。その結果、以下

のようなデンドログラムを得ることができ、9 つのタイプ (A~I) に分類することとした。(図04)

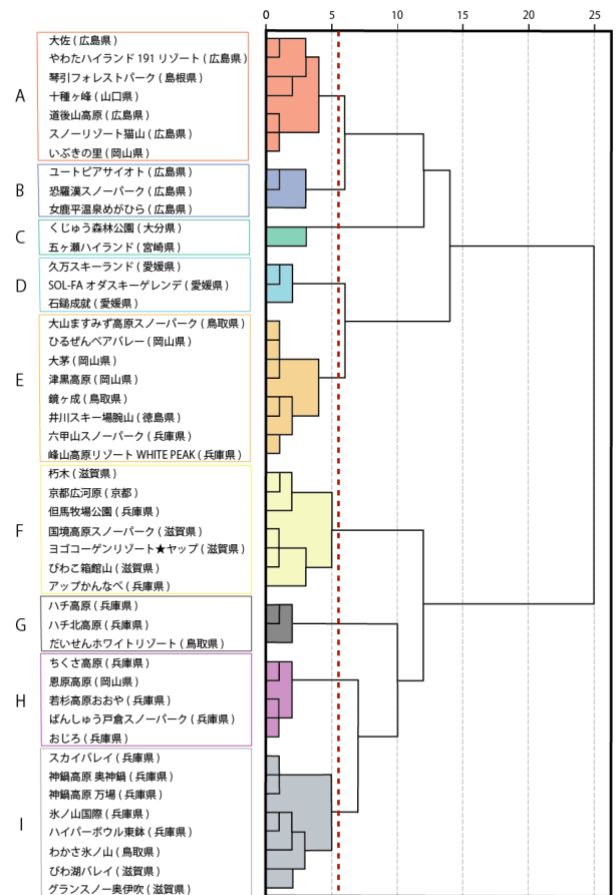


図04 クラスター分析によって得られたデンドログラム

3-3 タイプ別スキー場の特徴

図05~07 をもとにグループのタイプを示す。

(1) A: 広島圏・小規模タイプ (7 か所)

最高標高・最低標高は共にやや平均的で小規模なスキー場である。広島市内から 50km~200km 内に位置し、大阪や福岡からもアクセスが可能なスキー場も含まれる。

(2) B: 広島圏近距離・中規模タイプ (3 ヶ所)

最高標高はすべて 1000m 以上で比較的高い。広島市内から 100km 以内でアクセスと規模が比較的優れるが、大阪や福岡からのアクセスはやや難しい立地である。女鹿平温泉めがひらは近隣 IC から 5 分以内の立地で優れる。

(3) C: 福岡圏・小規模タイプ (2 ヶ所)

九州に唯一残るスキー場で、標高が高く見晴らしに優れるが、規模が小さい。福岡に依存しており、中国地方以東からのアクセスは見込めないことが考えられる。

(4) D: 広島圏遠距離・小規模タイプ (3 ヶ所)

愛媛県に位置するスキー場で、標高が高いスキー場が多いが、規模が小さい。また、広島から 200km~300km 内の遠方に位置し、瀬戸内海を超えないといけない。

(5) E: 大阪広島圏・小規模タイプ (8 ヶ所)

鳥取県・岡山県・兵庫県南部のスキー場で、標高は平

均的なスキー場が多い。しかし、峰山高原リゾートを除くと1番規模が小さいグループである。ヒルゼンベアバレーも同様に近隣ICからのアクセスに優れる。

(6) F：名古屋大阪圏・小規模タイプ（7ヶ所）

標高が共に低く、規模もアップかななべを除くと小規模である。しかし、名古屋からのアクセスが可能で、大阪からも100km～200km内にあることから、都市の近接性が高い。しかし、但馬牧場公園、朽木、京都広河原は近隣ICからの距離が60km程度と大きい。

(7) G：大阪広島圏・大規模タイプ（3ヶ所）

西日本の中で規模が突出して高く、最高標高が1100m～1200m付近で、標高差も大きい。大阪からは150km～250km、広島から300km前後に位置する。いずれも大山や氷ノ山といった名高い山付近に属する。

(8) H：大阪圏・小規模スキー場（5ヶ所）

標高は平均的で、規模が小さい。大阪からは100kmから200km内に位置し、名古屋・広島とも300km付近に位置する。兵庫県内における小規模スキー場を多く含む。

(9) I：大阪名古屋圏・小中規模タイプ（8ヶ所）

標高は平均並み・比較的大きい。名古屋圏内であることに加えて、大阪から200km以内に位置し、アクセスに優れる。①氷ノ山・鉢伏山、神鍋高原周辺に属するスキー場と②滋賀県の一部のスキー場を含み、①はハチ高原・ハチ北高原、アップかななべを中心としたスキー場に近接している。②は規模が特別大きくないが、グランスノー奥伊吹は西日本の最多来場者数を誇る。

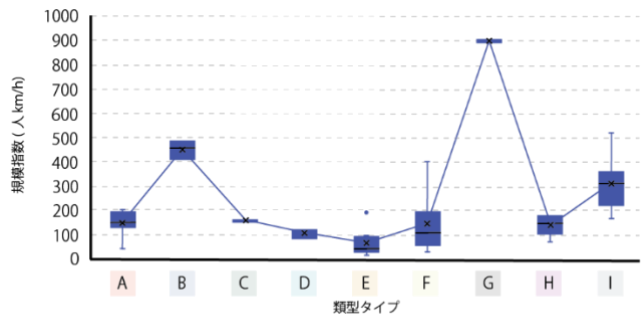


図07 類型タイプ別規模指数

第4章 西日本におけるスキー場の特性

4-1 地形図から見えるスキー場の立地特性

西日本におけるスキー場は内陸地の中央に位置する山地分布し、①A・B・E（六甲山スノーパーク・井川スキー場腕山を除く）・G・H・I（びわ湖バレー・グランスノー奥伊吹を除く）グループは中国山地に分布し、近畿と九州を結ぶ山陽自動車道・中国自動車道の北側で、瀬戸内海側から日本海側へと結ぶ4本の中国横断自動車道路に囲まれている。②Dタイプと井川スキー場腕山（E）は四国山地内に分布し、松山道や徳島道と県境に囲まれた内側に位置する。また、③びわ湖沿岸部周辺に位置する山地にはF（但馬牧場公園・アップかななべを除く。）グループとびわ湖バレー（I）・グランスノー奥伊吹（I）が、⑤瀬戸内海に面する六甲山地には六甲山スノーパーク（E）が分布し、これらの地域は沿岸部にそびえる山地で、山地からの堆積による平地に近接している。⑥九州山地では五ヶ瀬ハイランド（C）、⑦九重連山ではくじゅう森林公園（C）が分布しているが、高速道路が内陸部を横断していない地域であり、山間部の交通網は未発達であるといえる。全体で見れば、日本海側に位置する①や③に多くのスキー場が集中し、日本海性気候による降雪が要因となっている。（図08）

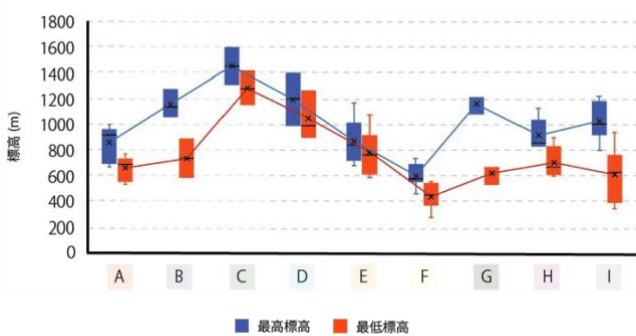


図05 類型タイプ別標高

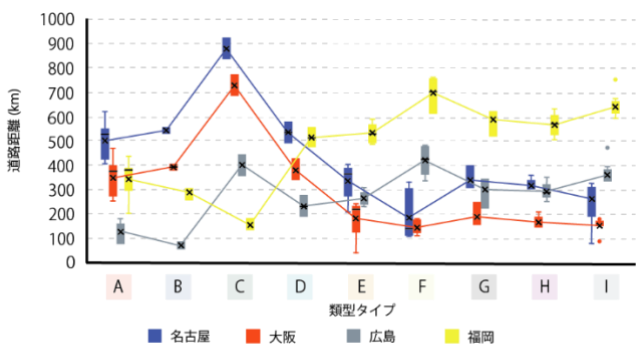


図06 類型タイプ別各大都市からの道路距離

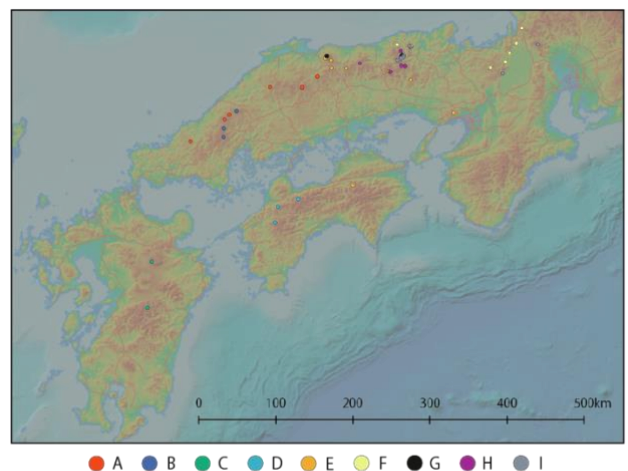


図08 地形図とスキー場の分布

出典：国土地理院 Web サイト <https://maps.gsi.go.jp/development/ichiran.html> (2023.01.16) 地理院タイル（色別標高図）を加工して作成。

4-2 スキー場の規模と標高差

西日本では、規模指数が約 2000 人 km/h 以下、標高差が約 250m 以下の範囲に集中しており、約 67%を占める。主なグループとしては A・C・D・E・F・H タイプが含まれる。例外としてアップかなべ (F) は標高差と比較すれば規模が大きく、ゲレンデが横側に広がっていくようにリフト開発が行われている。B・I タイプは十分な標高差はあるが、3人乗り以上のリフトが未整備であることやゲレンデの横への拡張が少ないスキー場が多い。Gタイプの3ヶ所のスキー場は、突出して規模が大きく、約 9000 人 km/h 程度である。(図 09)

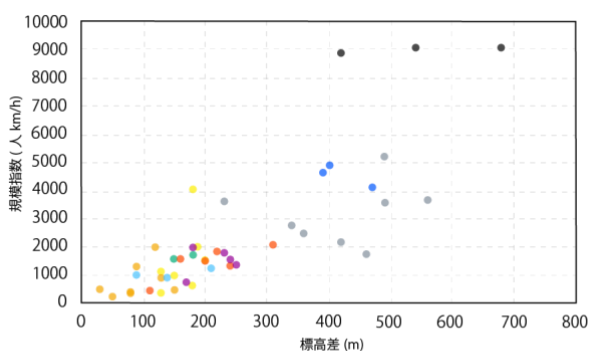


図 09 規模指数と標高差 (n=46)

4-3 宿泊施設数とオフシーズンの利用

宿泊施設数の集積をみると、15ヶ所以上はGタイプが多く、F・Iタイプでは5~14ヶ所の集積が多い。(表 02) これらは大阪圏内であり、距離にして約 150km~250km 以内に含まれる。宿泊施設数は、民宿が多くを担っており、石井 (1970) における民宿の分布から、スキー場と同様に大都市圏に依存することが考えられる。⁽⁷⁾ また、標高差のある規模が比較的大きいスキー場であることも共通点であり、多くの滞在時間を生む規模が必要であると推測される。オフシーズンの氷ノ山・鉢伏山や神鍋高原付近のスキー場の集積地や箱館山ではスポーツ合宿の利用が見られ、近隣の運動施設や宿泊施設が保有する体育館やグラウンドが利用されている。また多くのスキー場ではキャンプ場といったアウトドア利用も行われている。

表 02 タイプ別宿泊施設の集積とスキー場数

	なし	少数	集積 [小]	集積 [大]
A	3	4	0	0
B	2	0	1	0
C	2	0	0	0
D	1	2	0	0
E	2	6	0	0
F	4	1	1	1
G	0	0	0	3
H	3	1	1	0
I	3	1	3	1

なし...0ヶ所 少数...1~4ヶ所 集積 [小]...5~14ヶ所 集積 [大]...15~ヶ所

第5章 まとめ

スキー人口の減少により衰退するスキー場の立地的特性を分類し、そこに見られる宿泊施設の立地を考察してきた。以上のように、9つのタイプに分けることができ、それぞれの立地的な特徴がみられることがわかった。スキー場は主に広島と大阪を中心に分布していると捉えることができる。広島は比較的規模のあるスキー場が近接しているが、宿泊施設の立地は少ない。また、多くのスキー場は大阪を中心とした道路距離 300km 内に多く立地し、規模の大きいスキー場や宿泊施設数が充実しているのはスキー場の集積地である、①大山、②氷ノ山・鉢伏山、③神鍋高原の周辺スキー場であった。これらのスキー場では、多くのスキー場でみられたアウトドア利用や民宿などの宿泊施設ではスポーツ合宿利用がオフシーズンにみられた。これらはマストツーリズムによって形成された宿泊施設であると推測され、多人数を伴う合宿利用に適しているものと考えられる。よって、西日本においては、宿泊を伴ったスキー観光は大阪からのアクセスを中心とした比較的規模の大きなスキー場でみられる形態である。また、付近に他のスキー場が立地していることが多く、全国的には小さなスキー場であることを含めた宿泊施設の計画が必要となると考える。そのためには、それぞれのグループのスキー場を参考とし、各スキー場の個性や多様性を引き出せるような、スキー場と周辺地域を含めた全体の見直しが必要であると考察する。

参考文献と注釈

- 1) 電気車研究会・鉄道図書刊行会：鉄道要覧, 443-454, 2021
- 2) 実業之日本社：ニッポンのゲレンデ 2022, 145-168, 193-194, 2021,
- 3) 呉羽正昭：日本におけるスキー場の閉鎖・休業にみられる地域的傾向, スキー研究 Journal of Ski Science Vol 11, No.1, 27-42, 2014,
- 4) 八木浩司他：東北地方におけるスキー場開発の推移とその立地類型, 東北地理 Vol 43, 161-180
- 5) SURF&SNOW：全国スキー場情報, https://surfsnow.jp/search/list/spl_area01.php, (2023.01.16)
- 6) 呉羽正昭：スポーツと観光(2) -日本のスキー観光-, 菊池俊夫編, 観光を学ぶ -楽しむことからはじまる観光学-, 二宮書店, 86-96,
- 7) 石井英也：わが国における民宿地形形成についての予察的考察, 地理学評論, 43-10, 1970,

*1 山口大学工学部感性デザイン工学科 学生
 *2 山口大学大学院創成科学研究科 教授
 *3 山口大学大学院創成科学研究科 准教授

Stu., Dept. of Perceptual Sciences and Design Engineering, Yamaguchi Univ.
 Prof., Graduate School of Sci.Tech.for Innovation, Yamaguchi Univ.
 Associate Prof., Graduate School of Sci.Tech.for Innovation, Yamaguchi Univ